

Tokusan Essay

山の特産と文化

10

(独) 森林総合研究所管理官

埜田 宏

特産エッセイ

若松と苔松

正月の松

正月の植物であるマツについて考察する。先月号で西欧のクリスマスツリーやリースが冬至に関係した季節行事であることを述べた。わが国の正月飾りも常緑樹のマツを用いるので、クリスマスツリーと似ている。ところが、クリスマスは厳冬期を覚悟するための行事であるが、正月飾りは新春を祝うためのものである。

クリスマスと元旦は二カ月近く

離れているのが本来の姿。伝統的な季節行事は旧暦（明治五年まで使用された天保暦）の時代に成立している。現代のグレゴリオ暦は旧暦と比較して、平均して四一日ほど早い。平成十七年では二月九日が旧暦の元旦にあたる。

一年中で最も気温が低い時期は、太陽光が最も弱い冬至から一カ月遅れでやってくる。そのため、クリスマスは本格的な寒さの前、元旦は寒さの後の春にあたる。

門松

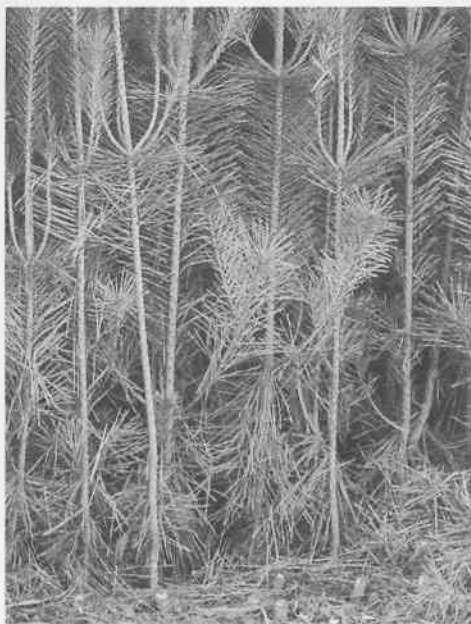
マツの語源について、神様が降りてこられるのを待つ木だからという説がある。しかし、門松を立てて歳神様を迎えるという風習はそれほど古くはないらしく、万葉集には門松の歌は見当たらない。梁塵秘抄の春十四首の最初に「新年春くれば、門に松こそ立てりけ

れ、松は祝のものなれば、君が命ぞ長からん」との歌があり、平安末期には門松があったようだ。

戦後の荒廃した山の緑化にマツが果たした役割は大きい。初期の全国植樹祭で植えられた樹種は、マツが最も多い。この頃は、マツを大切にしようと、門松の絵を印刷した紙を玄関に貼ってすませる。「新生活運動」というのがあった。今日では、松飾りが割り箸のように非難されることはない。

若松

花卉業界ではマツを若松、根引松、苔松と年齢別に分ける。新春にふさわしいのはもちろん切枝の若松である、真っ直ぐに伸びた幹に上向き短い枝のある樹形は、漢字のくさかんむりの元となった「艸」に良く似ており、いかにも元気な伸び伸びした様子である。成長が良い畑に密植のまま二〜三



若松として収穫されるクロマツの若木

年置き、徒長させるとこのような形になる（左写真）。

苔松

マツが重用されるもうひとつの理由は長寿のためである。材線虫病が侵入する前まで、マツは長寿の樹の代表であった。長寿の象徴は苔むした幹や枝の姿である。昔の屏風絵や能舞台の背景画のマツを見ると、幹には必ずコケが描かれている。

苔松のコケは白っぽい、地衣類のウメノキゴケやその仲間である。海岸松林のクロマツにウメノ

キゴケが密生していることは珍しいが、切枝にできるものは少なく、貼りゴケという技術（？）や銀色のペイントでも苔松が作られる。

庭園のツツジ類の枝にウメノキゴケが多量に発生することがあり、樹を弱らせると勘違いされる。このコケは夜露と適度な日照を必要とするため、葉の密生した枝では生育できず、樹が弱って葉が疎らになると良く成長する。原因と結果を取り違えてはならない。

生産と販売

花卉の業界では、特定の日に需要が集中する商品を物日花材というそうである。東京都卸売市場の過去一年間の統計ではマツの束物二五〇万束のうち八五%、一本物のうち九七%が十二月に集中している。産地では、近在の労働力をかき集めた集中的な収穫が十一月からはじまり、切枝で水槽に漬け、松市（本年度は十二月十二日）への出荷まで保存される。

若松の主産地は茨城県南部の鹿



クロマツの樹皮上に生育するウメノキゴケ

島灘に面した波崎町で、首都圏の需要の八割をまかない、北陸から北海道まで出荷している。当然、波崎町の町の木は松である。なお、町の花は千両でこちらも主産地であるから、年末は大忙しである。

切枝用のマツ生産は、根張りを重視しつつ地上部の徒長をきょう造林用の苗木とは作り方が異なる。しかも、花卉は生け花教室を通じた大量流通ルートがある。特用林産物としての参入は難しい。大型の素材を中心にした少量多品種の供給を目指すべきと思われる。